

そうがく社おすすめ

『日本語を教えて2、3年の人に』 読んでほしい3冊

『アジアにおける日本語教育』

本名信行・岡本佐智子 共編
三修社 A5判 216ページ 3,000円

自分が教えている学習者の出身地が日本とどんなつながりを持っているか、考えたことはありますか。国内で教えている日本語教師も、海外、特に日本語学習者の多いアジア地域でどんな日本語教育が行われているのかわ知っておくことが大切。本書では、韓国・中国・インドネシア・シンガポール・オーストラリアの歴史や教育制度・政策、日本語学習者の現在の状況などをまとめています。



を持ってもらいたいと言う。また、「一度は海外で教える経験を持つといいのではないか」とも考えている。大学や日本語学校、ボランティアなど、どんな現場で教えていても、国内では、そこにいる学習者の目的や学習者を取り巻く環境はほぼ一定していて、ある意味で閉ざされた場が確立しているといえる。そのため、日本の外に出て日本語教育を見つめてみると、例えば、多民族で構成されている国における日本語教育と日本国内のそれとの違いなどが見えてくるのではないか。そして、そこで改めて日本語教師である自分の役割を意識し、これからの方向性を確認することが必要なのではないか、ということだ。

ぱっと見の印象では声を掛けにくいと思うかもしれないが、怖い人ではない（と思う）ので、何か聞きたいことがあれば何でも聞いてみよう。現在の

『国語という思想』

イ・ヨンスク 著
岩波書店 四六判 368ページ 3,000円

日本語教育について学んだとき、「日本語」と「国語」の違いを考えた人も多いと思います。では、「国語」という言葉の概念についてはどうでしょう。「国語」とは、また、「国語の思想」とはどのようなものだったのか、明治初期から第2次世界大戦中までの国語政策の軌跡を、上田万年と保科孝一という二人の言語思想を軸にして解き明かす本書は、現在「日本語」を教えている人にも意識してほしい内容の一冊です。



『日本人の境界』

小熊英二 著
新曜社 778ページ 5,800円

沖縄(琉球)の編入と復帰、アイヌの同化、台湾・朝鮮の植民地支配を歴史的に振り返りながら、その時代時代にわれわれ日本人が「日本人」という言葉にどんな意味を与えてきたかを振り返るとともに、日本人であるという境界線の今日的意味を検証します。



そうがく社は立ち読み禁止。だから、いすが置いてある